

対話による学びの創造 —デンマークの教育実践より—

衛藤 千晴*

Creation of Interactive Learning —From Danish Education Practice—

Chiharu ETO

【要旨】

本研究においては、「学び」を「自分のものの見方が広がったり、自分の考えがよりよいものに変化したりすること」と定義したうえで、子どもの学びの創造を実現するために、教員として必要なことについて究明することを目的とする。その際、学びの創造が実現していると考えられる現在のデンマークの教育実践を参照とする。

子どもの学びの創造を実現するために、教員として必要なことは、子どもの中の「私の考え」から「私たちの考え」を構築することである。そのためには、まず、教員と子どもとで「対等」な関係をつくる。そして、「対話」により、互いに互いの考えを主張し合い、互いに互いの考えを聴き合い、文化として「よきこと」を共に追究する。つまり、「私の考え」から、「対話」により、互いに互いの考えを主張し合い、互いに互いの考えを聴き合い、文化として「よきこと」を共に追究することで、「私たちの考え」を構築するのである。

キーワード：対話、デンマーク、学びの創造

1. はじめに

デンマークでは1840年代から、学校教育の改革が行われた。その教育改革を行った中心人物がグルントヴィ（1783-1872）だった。当時のデンマークでは、教員が示す内容を子どもが受動的に「丸暗記」する教育と、教員が示した内容を子どもが覚えていくかを確かめる「試験」が行われていた。教員は一貫して、子どもに知識を「教える」立場であり、子どもは教員に知識を「教えられる」立場だった。そして、子どもは教員に教えられた知識を、その知識に含まれる意味を考えたり、理解したりすることな

く、ただ正確に覚えることが求められた。グルントヴィは、当時のデンマークのこのような教育を批判した。なぜなら、単に教えられた知識を丸暗記するのみでは、知識にどのような意味があり、その知識が自分たちの生活や周囲の世界とどのように関連しているのかを理解することがないため、その知識を自分たちの生に真に意味をもって生かすことができないからである。本来、学びとは、学ぶことによって、自分のものの見方が広がったり、自分の考えがよりよいものに変化したりすることである（佐伯、2000）。だからこそ、学びは自分たちの生活に影響

* えとう ちはる NPO 法人にこにこの会

を及ぼす、自分たちの生に密着したものとなる。つまり、グルントヴィは学びの創造がないこのような教育を批判した。そして、学びを創造するために、「対話」による教育を推進した。他者との「対話」を通して、子ども自身の考えを広げたり、深めたりすることこそが学びの創造であり、教育であると考えたからである。

グルントヴィの教育改革により、現在のデンマークの学校教育では、「対話」、「討論」という教育方法が中心となった。筆者が訪れたデンマークの国民学校2年生の教室では、子どもたちが3〜4人で丸テーブルを囲んで座り、教員と子どもの質問や応答は「対話」で行われていた。筆者がクラスの子どもたちに「日本から来ました」と自己紹介をすると、「日本はどこにあるの?」という質問や「寿司を知っている」、「東京は日本だよ」という意見が子どもたちのほうから上がった。2年生クラスの担任教員Mは、世界地図を出して、「日本はどこにあると思う?」と質問すると、クラスの半数以上の子どもが挙手をした。担任教員Mに当てられた子どもたちは、黒板の前まで小走りで駆け寄ってきて、オーストラリアやロシアの方面を指した。担任教員Mが「なぜここ（オーストラリアの位置）に日本があると思うの?」とオーストラリアを指した子どもに質問すると、その子どもは、「日本は島国だどこかで聞いたから」と答えた。ロシアを指した子どもはその理由を「日本はアジアだから、アジアの中にあると思ったから」と答えた。担任教員Mが「日本がアジア地域にあるというのは、わたしもそう思うよ」と言うと、他の子どもたちからも「そう思う!」や「デンマークはヨーロッパだね」という意見が出た。さらに、担任教員Mから「じゃあ、アフリカ地域はどこかな?」と子どもたちに質問すると、ほとんどの子どもが挙手をし、当てられた子どもは黒板の前まで来て、世界地図の中のアフリカ地域を指で囲んでいた。

この授業では、教員が子どもに一方的に教えるという形態はとられていなかった。子どもから生まれた問いに対して、子どもだけではなく、教員も共に考えていた。すなわち、子どもと教員が「対話」を通して共に探究していた。これは、まさにグルントヴィが目指した「対話」を通した学びの創造であった。

本研究においては、「学び」を「自分のものの見方が広がったり、自分の考えがよりよいものに変化

したりすること」と定義したうえで、子どもの学びの創造を実現するために、教員として必要なことについて究明することを目的とする。その際、学びの創造が実現していると考えられる現在のデンマークの教育実践を参照とする。

2. 「対話」による教育の構築

現在のデンマークの教育システムの土台を作ったのは、グルントヴィとコルである。グルントヴィは、デンマークの教育思想の土台をつくった人物で、コルは、グルントヴィの教育思想を参考に教育を実践した人物である。

2.1 グルントヴィの教育思想

ニコライ・フレデリク・セヴェリン・グルントヴィ（1783-1872）は、1840年代のデンマークで学校教育の改革を行った中心人物である。現在のデンマークの公教育には、グルントヴィの教育思想が受け継がれている。

グルントヴィが教育の中で必要と考えていたのは、「対話」による教育だった。なぜなら、グルントヴィは「民主主義」の国を目指していたからである。そのためには、農民と教員、知識人、官僚、その他の民衆など全ての国民が「平等」な立場で、自分の思ったことを自由に発言できる国民づくりを、「対話」による教育で行う必要があった。グルントヴィは、「対話」による教育を行うための「生のための学校」を構想した。「生のための学校」とは、農民、教員、知識人、官僚、その他民衆など全ての国民が「対等」な存在である学生として、分け隔てなく交わり合うことができる学校である。さらに、「生のための学校」は全寮制であり、教員と学生が共同生活をする。学生同士の「対話」、学生と教員の「対話」を中心とした授業をする小規模の学校である。全寮制であることにより、授業以外の生活する時間にも、学生同士や学生と教員との「対話」は必要不可欠なものとなる。また、学校には規則をあえて設けず、規則は学生と教員が話し合って決めるという「民主主義」のあり方を取り入れている。グルントヴィの構想した「生のための学校」では、互いの生の経験を語りあうという自由な「対話」による教育が行われる。「対話」によって、他者に自分の意見を聞いてもらったり、他者の意見を受け入れたり、双方の意見を合わせて新たな意見を作り出す。そして、自分と異質な他者と「対話」を重ねること

で、他者の考えや文化を認め、自分の考えを広げたり、深めたりして、自分の考えをよりよいものに変化させるのである。

グルントヴィは、このような「対話」による教育が行われる「生のための学校」を構想し、自分の教育思想を当時のデンマークの農民たちに伝えたが、自ら学校を設立することはなかった。グルントヴィの構想した「対話」による教育は、教育者コルによって、実現することとなった。

2.2 コルの教育実践

クリステン・コル(1816-1870)は、現在のデンマークの教育システムの土台をつくった教育者である。

1851年、「コルの学校」が開校した。学校には14歳から33歳まで15人の学生が集まった。そこで、コルは「対話」を中心とした教育を実践した。これが、現在のデンマークの成人の学校、「フォルケホイスコーレ」の教育システムを決定することとなった。「コルの学校」は、グルントヴィの構想した「生のための学校」と同様、数か月の全寮制であり、教員と学生が共同生活をし、少人数の学生同士の「対話」、学生と教員の「対話」を中心とした授業をする小規模の学校であった。開校してから、その学校は、農民を中心とした民衆から評判を集めた。そして、その学校にならった、数か月の全寮制、教員と学生が共同生活、「対話」を中心とした講義をする小規模の学校は、「フォルケホイスコーレ」と呼ばれるようになり、デンマーク各地につくられていくこととなった。

1853年、コルは日本でいう小中学生の子どもを集めて、「対話」による教育を行う私設の通学制の学校、「フリースコーレ」を創設した。現在も「フリースコーレ」は、デンマークの私立の小中学校として存在している。「フリースコーレ」は、コルの公立学校での代用教員の経験に基づいてつくられた。つまり、コルが批判した「暗記」や「試験」をしない学校としてつくられた。「暗記」や「試験」をせず、子どもの自主性を尊重した教育、子ども同士の「対話」、子どもと教員の「対話」による教育を進めた。授業内容は、保護者と教員との間で緊密な連絡をとって決めていった。「フリースコーレ」で行われていた教育は、その後のデンマークの公教育に影響を与え、次第に公教育の教育にも取り入れられていった。

3. デンマークの教育実践

筆者が訪れたデンマークの幼稚園、日本でいう小中学校にあたる国民学校と、筆者が実際に参加した「フォルケホイスコーレ」での教育実践について考察する。

3.1 デンマークの幼稚園

デンマークの幼稚園では、子どもたちは季節も天気も問わず、外で遊ぶ。雨の降る日はカッパを着て、真冬の気温が低い日や雪の降る日は防寒着を着て、外で遊ぶのである。日本でいう保育士や幼稚園教諭にあたるペタゴーは、子どもに遊びを促すようなことをしたり、ペタゴーの考えた保育活動を子どもの思志とは関係なく参加させたりすることはしない。子どもの自主性を尊重し、子ども自身に遊びの決定権を持たせている。



写真1 外で遊ぶ子どもたち

3.1.1 森の幼稚園

2014年4月29日、筆者はデンマークで「森の幼稚園」と呼ばれている Bornethuset Dragen を訪れた。

子どもたちは、幼稚園の敷地内にある屋外の遊具広場で、友達と一緒に砂場遊びをしたり、アスレチックに登って遊んだり、一人でブランコを漕いだりして、自由に遊んでいた。一方、ペタゴーたちは、子どもたちのそばのベンチに座り、コーヒーを飲み、ペタゴー同士でおしゃべりをしていて、一見、何も保育の仕事をしていないような印象を受けた。しかし、ペタゴーたちは、あえて遊びに介入しないことで、子どもたちの自主性を尊重し、子どもたち自身に遊びの決定権を持たせていたのである。

【お花摘みをする女兒 A と女兒 B】

幼稚園の敷地内にある広大な森では、遊具広場の

様子と同様、子どもたちは自由に遊んでおり、ペタゴーたちは木のベンチに座り、子どもたちの遊ぶ様子を眺めながらペタゴー同士でおしゃべりをしていた。

女兒 A は、地面に生えている小さな花を一つひとつ丁寧に摘み取り集めて、可愛い花束を作っていた。それを見ていた女兒 B も少し離れた場所で、花を摘みはじめた。二人の女兒は、花摘みをしている間、一言も言葉を発せず、他の子どもと関わる様子もなく、ただひたすらに夢中に花を摘み続けた。二人は、楽しそうな嬉しそうな表情をしていた。女兒 A は手いっぱいの花束を持って筆者のところに駆け寄ってきた。そして、黙ったままその花束を筆者に差し出した。筆者は花を一つも落とさないように気を付けながら、女兒 A からそれらを受け取り、デンマーク語で「ありがとう」と伝えた。女兒 A は嬉しそうに「どういたしまして」と答えた。女兒 B も自分なりの花束を完成させて、ペタゴーのところへ行って、その花束をプレゼントしていた。

ペタゴーは子どもに対して、遊びを促すことはなかった。森の中で花を摘み、花束をつくっていた間、女兒二人は、一言も言葉を発することなく、それに集中していた。もし、そこでペタゴーが女兒たちに対して何か声掛けをしていたら、夢中になっている女兒たちの遊びを台無しにしてしまっただろう。

【転んでしまった男児 D】

男の子たちのグループは森の中で、笑い声をあげながら駆け回っていた。そのグループの中で、一人の男児 D は土の上で転んでしまった。男児 D は、手とひざを地面についた姿勢で、眉間にしわを寄せて、一瞬泣きそうになったが、周りの友達が楽しそうに遊んでいる様子を見て、すぐに立ち上がり、男の子のグループのほうへ再び駆け寄って行った。遊びの中に戻った男児 D は、すぐに笑顔を取り戻していた。ペタゴーはその様子を 3 メートルほど離れた場所で見えていたが、特に男児 D に声を掛けることはしなかった。

ペタゴーは、転んでしまった男児 D の様子を見ていたが、男児 D に駆け寄ったり、声をかけたりはしなかった。なぜならもしペタゴーが転んだ直後に男児 D に駆け寄っていたら、男児 D は男の子のグループの遊びの中から一時的に離脱するかたちになってしまったからだ。ペタゴーたちは子どもたちのそばで、子どもたちから必要とされた場合に備え

て、様子を観察していた。子どもが大人の助けを必要としない場合、大人が子どもの手助けをする必要はないのである。

森の中で遊ぶ子どもたちは、それぞれが目の前の遊びに夢中になっていた。自然の中で子どもたちは自分の力で遊びを見つけ出していた。ペタゴーは子どもたちの遊びに手を出さずに見守るというかたちで、子どもたちの自由を最大限に尊重していた。

【朝の会で「対話」を学ぶ】

デンマークの幼稚園では、国民学校（小中学校）に入学する前に、基本的な集団行動を学ぶ。基本的な集団行動とは、例えば、友達の話はよく聞くこと、自分が何か話したいときは挙手をしてペタゴーに当てられてから話し始めること、自分が話したくても友達の話を遮ったりしないことなどである。

幼稚園の朝の会では、半分以上の子どもたちは静かに座っていた。しかし、女兒 R が話している途中にもかかわらず、女兒 O と女兒 P は二人でおしゃべりに夢中で、お互い顔を見合わせて楽しそうにくすくすと笑っていた。ペタゴーは女兒 O と女兒 P に、シーっと人差し指を口元に近づけるジェスチャーをして、女兒たち自身に気付かせるような対応をした。ペタゴーのジェスチャーを見て、女兒 O と女兒 P は何かに気付いた様子でおしゃべりをやめた。ペタゴーは女兒 O と女兒 P に「今は女兒 R の話をみんなで聞こうね。あなたたちの話はあとで聞くからね」と穏やかな声で伝えた。女兒 R の話が終わると、ペタゴーは女兒 O と女兒 P の話を聞いていた。

女兒 O と女兒 P は、女兒 R の話を静かに聞き、ペタゴーとみんなに自分たちの話を聞いてもらう経験により、朝の会を通して、自分の話を聞いてもらう、相手の話を聞くという「対話」による教育の基礎を学んでいた。

3.1.2 農場幼稚園

「農場幼稚園」とは、昔の農家の屋敷などを活用し、広い敷地に家畜を飼っている幼稚園のことである（銭本、2012）。

2014 年 6 月 6 日、筆者は「農場幼稚園」と呼ばれているキャプタインゴーンに訪れた。この幼稚園では、学年やクラスがあえて作られていない。ペタゴーは子どもの遊びに手を出しすぎず、子どもの自主的な活動の「サポーター」をしている。子どもに

自分で遊びを選択させることにより、子ども自身の考える力を育てている。ここでは、子どもたちは登園すると、今日は何をして遊ぶのかをまずペタゴーに伝えてから、遊びをはじめる。それにより、何をすればいいのかわからない子どもをペタゴーが把握することができる。今日何をするのかをなかなか決められない子どもには、ペタゴーから話しかける。そして、その子ども自身がどんな遊びに興味があるのか、何をやりたいのか、誰と遊びたいのかをペタゴー側で理解し、それを子ども自身に気付かせるようにじっくり話をする。また、クラスは存在しないが、登園時に子どもがペタゴーに伝えたやりたい遊びが、何人かの子どもの中で同じだった場合は、グループをつくって一緒に遊びをすることがある。グループをあえてつくることで、興味の持っている遊びが同じ子ども同士の関わりのきっかけとなるのである。



写真2 ビーズつくりのグループ

【けんかを止めに入らないペタゴー】

この幼稚園で禁止していることは、他の友達を殴ったり、言葉で傷つけたりすることである。だが、もし子ども同士がけんかをしても、ペタゴーはすぐに止めには入らない。けんかした状態を子ども同士でどう解決しようとするのかまで見守り、子ども同士での解決は難しそうだとペタゴーが判断した場合のみ、仲裁に入る。カーン・ミューラー園長は、「子どもは自分で学ぶ力を持っている。それを信じ、手を出さずに遊びを見守ってあげれば、子どもは自分でものごとを解決する能力を手に入れる（銭本，2012，p 93）」と話していた。

【保護者との「対話」の時間】

この幼稚園では、保護者とペタゴーとの連携を大事にしている。なぜなら、子どもの保育は幼稚園と家庭の両方で行われるからである。

朝、保護者が子どもを幼稚園に送ってくる時間に、保護者とペタゴーと一緒に話す機会として、コーヒータ임が設けられている。それは、決して強制ではない。だが、それにより、幼稚園での子どもの様子と家庭での子どもの様子を、幼稚園と保護者で共有できる。さらに、保護者側と幼稚園側の保育観も共有している。また、保護者側からも、日々の子育ての悩み相談をペタゴーにすることができる。保護者側の希望があるいは、幼稚園側で面談を行うほうがよいと判断する場合は、コーヒータ임の他に、必要に応じて保護者とペタゴーとの個人面談を行っている。

このように、デンマークの幼稚園が、保護者との連携を大事にしたり、保育園側の保育観を保護者に伝えたりするのは、コルがつくった「フリースコーレ」の教育内容を保護者と話し合って決めるというのと同様である。つまり、コルがつくった「フリースコーレ」での保護者と教員が連絡を緊密に取るという習慣は、現在のデンマークの幼稚園にも引き継がれている。

3.2 国民学校（小中学校）

国民学校では、具体的な教育内容を教員と保護者との話し合いで決め、必要に応じて、都度変更していく。国指定の教科書などは存在しない。市や国から予算をもらえるが、それ以外の授業時間や職員雇用などの学校運営は、各学校の自由が認められている。教員は保護者と決めた教育内容に合わせて、目の前の子どもたちの習熟度に合わせて、自由に教材を選ぶことができる。

国民学校では入学年齢は、8月1日以降に7歳になる児童が目安とされている。あくまで目安であり、入学年齢は明確に決められていない。もし、子どもの成長の様子から学習できると判断されれば、5歳や6歳からの入学も可能である。また、学年の年齢についても、目安があるだけである。保護者と教員が相談し、子ども本人の気持ちも考慮して、もう1年、同じ学年で学ぶほうが良いと判断される場合は、子どもは同じ学年を1年延長する。だから、1つ2つ年齢が違うクラスメイトがいることは、デンマークでは決して珍しいことではない。このように、国民学校では、子ども個人の学習の習熟度に合わせた学年で教育を受けることが大事とされている。

国民学校では、1クラス最大28人とデンマークの法律で決められている。例えば、1クラスが29

人以上になってしまったら、そのクラスを割らなければならない。したがって、国民学校の1クラスあたり児童数の平均は20人程度である。少人数の子ども同士の「討論」や、子どもと教員の「対話」が主な授業方法となっているので、1クラスの児童数が少ないほうが都合がいいのである。

国民学校では、試験は存在しない。これは先述した通り、子どもが教員の示した学習内容を暗記しているかどうかを確かめる「試験」をグルントヴィが批判したことと、コルがつくったフリースコーレで「試験」を行わない教育をしていたことが影響している。ただし、卒業する学年である9年生あるいは10年生には、デンマークで全国一律に行われる卒業試験がある。この卒業試験は、国語、数学、英語、科学の必須科目のほか、進路先によって選択科目が異なる。試験内容は、子どもが「暗記」できているかどうかの試験ではない。卒業試験を受ける子どもは、試験官である他の国民学校の教員に、各教科で自分の選んだテーマに沿って自分で作った論文を配布し、その教員たちに自分の作ったパワーポイントで発表する。教員たちは論文を見ながら、発表している子どもに質問をしたり意見を言ったりする。つまり、卒業試験であっても、「対話」重視の試験となっているのである。

【授業に参加するということ】

筆者は国民学校0年生のデンマーク語の授業を観察した。教室内で、子どもたちは、いくつかの丸テーブルを3、4人ずつで囲むように座っていた。教員がクラスの子どもたちに向かって質問をすると、半分以上の子どもたちが挙手をした。質問に対する子どもの答えが間違っている場合でも、教員は子どもの意見を否定せずに、「そうだね」とその意見を受け入れていた。また、子どもが正解を答えても、教員の子どもに対する対応は同様だった。手を挙げずに発言してしまった子どもに対して、教員はシーッと人差し指を口元に近づけるジェスチャーをして、子ども自身に気付かせるようにした。他の子どもが話している途中にもかかわらず発言する子どもには、「今は〇〇さんのお話聞きましょう」と伝えた。すると、その子どもは話すのをやめて、教員にアピールするように手を大きく挙げた。クラスで授業を受けている半分以上の子どもたちは、背筋が伸びている姿勢で椅子に座り、意見を言っている子どもの話を聞いたり、教員のほうを見たりしていた。しかし、中に

は教科書をまるめている女兒がいたり、あくびをしている男児がいたり、自分の足を机の上に上げている男児がいたり、椅子の上で正座している男児がいたり、床に寝そべっている男児がいたりした。話を聞く姿勢は、それぞれの子どもによって多種多様だったが、教員が子どもたちに対して質問をすると、ほとんどの子どもたちは各々の姿勢のまま、挙手をしていた。挙手をして発言をする子どもがいつも同じ子どもとは限らず、約一時間のデンマーク語の授業では、一度も発言をしていない子どもは2人程度だった。

この授業は、教員と子どものやりとりで成り立っていた。教員が話していた時間と同じ割合で、子どもたちが授業中に発言していたからである。そして、教員の質問に対して、子どもが間違った答えを言っても、正解を答えても、「そうだね」と子どもの意見を受け入れる教員の対応は、変わらなかった。それにより、子どもはどんな発言も教員に受け入れてもらえると感じることができる。さらに、間違いに臆することなく発言をたくさんしようという気持ちが生まれる。「対話」による教育では、まず、子どもの「発言したい!」という意欲が必要である。0年生の授業では、子ども同士の「対話」は見られず、教員と子どもによる「対話」で授業が進んでいた。それは、0年生の時期が幼稚園の時期と同様に、「対話」による教育の基礎づくりをしている時期だからである。そして、手を挙げずに発言してしまった子どもに対する教員の対応は、先述した「森の幼稚園」でのペタゴの対応と同様であった。子どもに対する、教育現場で子どもと接する立場にある大人の対応は、一貫していた。

授業後、0年生クラスの教員に授業中に姿勢が悪い子どもたちがいるが、なぜそれを注意しないのかと質問した。教員は、「子どもが授業に参加できるならば、子どもの姿勢などあまり気にしていない」と答えた。授業に参加するとは、教員の話聞くこと、他の子どもの意見を聞くこと、自分の意見を発表することである。教員の質問に手を挙げて意見を言おうとしている子どもは授業に参加したい意欲があった。つまり、デンマークの教育現場では、自分の意見を言わないで姿勢を正しているよりも、教員や他の子どもの意見を聞き、自分の意見を発言して授業には参加することが大事にされていたのである。

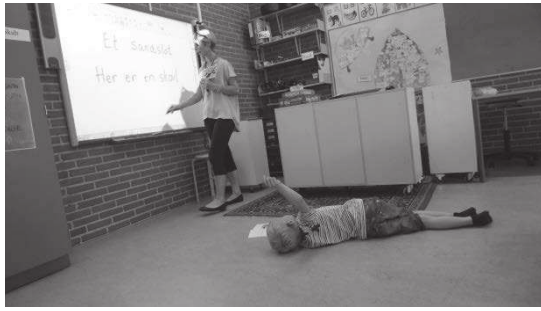


写真3 寝そべりながら挙手をする男児

3.3 フォルケホイスコーレ

「フォルケホイスコーレ」は、グルントヴィの構想した「成人のための学校」をもとに、1851年、教育実践者であるコルがつくった学校である。

「フォルケホイスコーレ」は、満17歳半以上であれば、性別、年齢、障害の有無、国籍を問わず、誰でも入学することができる。特色は、試験をせず、卒業時に資格も与えず、全寮制で教員と学生が共同生活をして学び、カリキュラムは自由で、学生同士の「対話」、教員と学生の「対話」による教育を行い、国家の干渉を受けない私立の学校である（清水、1993）。「フォルケホイスコーレ」は、現在デンマークに100校以上あり、数十人規模の学校が主流である。学期は2ヶ月の短いものから、最長8ヶ月までさまざまであり、本人の意思で好きなだけ期間を更新することができる。そこでは、学校で何か技術や知識を習得することが目的ではなく、あくまで授業や討論、実践、実習、生活を通して、自己発見をし、これから生きる自分の道を探すことが目的である。教育費について、「フォルケホイスコーレ」は政府の援助を受けるが、すべて私立の学校であり、政府からの干渉は一切受けないというのが原則である。

学校の決まりごとは、学校に関係する者が「対等」な立場で話し合いをして決められる。授業の中で、教員と学生の立場は「対等」で、授業は学生の意見で作られる。「フォルケホイスコーレ」では、学期ごとにメンバーが大きく変わるので、各学期で学生と教員の話し合いを行い、必要に応じてその学期期間のみ行使される校則が作られることが多い。全寮制であることにより、生活の中でも、学生同士や学生と教員との「対話」は、必要不可欠である。授業科目は、決まったものではなく、自由である。学期のはじめに、学生たちは様々なテーマの授業の中からいくつかを選択し、自分だけの時間割を作成する。授業では、学生の自発性が求められており、10人

程度のグループ単位で動く。授業内容は、国民学校同様、学生同士の「対話」または、グループワークとなる。学外での見学や実習も多いのが特徴である。このように、「フォルケホイスコーレ」では、グルントヴィが構想した「対話」による教育が行われる「生のための学校」が実現している。

3.3.1 ノーフュンホイスコーレでの生活

筆者は3か月間、デンマークのハリスレウにある「ノーフュンホイスコーレ」に在学した。

【学校の決まりごとは学生たちが決める】

この学校の規則は、薬物使用と薬物所持が禁止なことと、授業に支障をきたすような飲酒をしないことだけである。「ノーフュンホイスコーレ」には生徒会が存在する。各コースに数名代表者がいて、その代表者が毎週行われる生徒会に出席する。生徒会で話し合われたことは、代表者を通して各コースの学生に伝えられる。代表者の人数は5人以上の学生につき1人と決められている。在学している学生は、学校の規則以外に新たに学校内の決まりごとが必要だと感じたら、生徒会をしているコースの代表者である学生に、必要だと思う決まりごととその理由を伝える。そして、代表者はそれをまず生徒会の議題に挙げる。挙がった議題は学校内の決まりごととして必要か否かのディスカッションが行われる。代表者たちはそれぞれ必要である理由と必要でない理由を意見して、話し合う。その結果、生徒会で決まりごとが必要だと判断されたら、集会の時間に全学生に向けて、「新たな決まりごとについて生徒会では必要だと判断したが、みんなはどう思うか」という是非を問う。そのとき、生徒会の出した意見に対して反対意見を持っている学生は、挙手をして反対の理由を述べる。賛成意見を持っている学生も挙手をして意見を述べる。反対意見と賛成意見を聞いた上で、その新たな決まりごとが多くの学生に受け入れられた場合は、それが新たに学校内の決まりごととなる。

筆者の在学時にも、学生からの意見で新たに加えられたルールがいくつかあった。例えば、夜眠っている学生の迷惑にならないように22時以降は寮内で静かにすること、自由時間に学校内でイベントを開催したい場合は食堂の掲示板にイベント内容のチラシを掲載することができるなどだった。

このように、学校の決まりごとは、学校に関係す

る者が、「対等」な立場で話し合いを行い、決められる。学生たちが対等な立場で自由に意見をいうことができる学校内では、グルントヴィが必要だと主張した「民主主義」が成り立っていた。

【授業は学生たちの意見から成り立つ】

自転車のクラスでは、毎回 15km から 30km の距離をサイクリングを行った。授業では、サイクリングで向かった公園で BBQ をしたことがあった。BBQ の材料は、クラスのメンバーで自転車の荷台に野菜や肉を詰んで持って行った。向かった先では、食材を切る人、食材を煮る人、肉やソーセージを焼く人各自役割を決めて行った。また、別の日の授業では海岸で石ころを、公園で葉っぱや花などを拾ってきて、授業が終わった自由時間にそれらを使ってみんなでアートを作った。自転車クラスの教員マリアンナは、「今日の授業はどうだった？ 次回の授業は浜辺へ行って BBQ をする予定だけど、みんなはどう思う？」と毎回の授業後に学生の意見を聞いていた。学生たちは、「今回は楽しかった」「サイクリングの走行距離が長かったので体力的にきつかった」などの授業に対する意見や、「お城へ行きたい」「障害児の学校へ行きたい」などの次回の授業に関する意見をマリアンナに伝えていた。学生の中から挙がった次回の授業に対する意見を他の学生たちも賛成すると、その意見にそった授業が行われた。

音楽のクラスでは、学生がボーカルやギター、ベース、キーボード、パーカッションなど自分の好きなパートを選び、それぞれが教員プレブンの指導を受けながら曲を練習した。学生から希望曲があり、みんながいいねと賛成すれば、みんなでその曲を練習した。音楽クラスは他の学生に向けての発表会が設定されていたので、それを目標に自由時間にも音楽クラスで使っている教室を借りて練習をした。

それぞれの授業では、教員は授業の中で学生の意見を尊重され、教員と学生の立場は「対等」に感じられた。

【「対話」が必要不可欠な寮生活】

自由時間は多国籍の友達とおしゃべりをして過ごしたり、他の学生が企画したイベントに参加したり、それぞれの学生が自由に時間を過ごしていた。この学校では、多国籍の学生が一緒に暮らしていた。それぞれの学生には仏教、キリスト教、イスラム教などの宗教の違いや文化の違いが存在した。また、18

歳から 40 歳という年齢の違いも存在した。全寮制であることにより、生活の中で学生同士や学生と教員との「対話」は、必要不可欠だった。「対話」により、自分の意見を聞いてもらったり、相手の意見を受け入れたり、双方の意見を合わせて新たな意見を作り出すことができた。

このように、「フォルケホイスコーレ」で生活することにより、異質な他者と「対話」を重ねることで、他者の考えや文化を認め、自分の考えを広げたり、深めたりすることができた。



写真 4 ノーフュンスホイスコーレの友人たち

4. 「対話」による学びの創造

なぜ、デンマークの教育実践においては学びが創造されるのか。

学びとは、学ぶことによって、自分のものの見方が広がったり、自分の考えがよりよいものに変化したりすることであると述べた（佐伯，2000）。文頭で述べた国民学校 2 年生クラスでは、その授業の内容は、子どもの「問い」からはじまっていた。一人の子どもから生まれた「問い」を、クラス全体で考えていた。子どもは当てずっぽうでロシアやオーストラリアを指していたのではなく、子どもなりに考え、ある根拠をもった上で、そこを指していた。担任教員 M は子どもの発言が、質問に対して正解であるか不正解であるかに関係なく、子どもなりに考えた意見を尊重していた。授業は、子どもそれぞれが持っている知識から成り立っていた。幼稚園では、ペタゴーは子どもの自主性を尊重し、子ども自身に遊びの決定権を持たせていた。子どもは朝の会を通して、自分の話を聞いてもらう、相手の話を聞くという「対話」による教育の基礎を学んでいた。国民学校 0 年生クラスでは、2 年生クラスと同様、子どもなりに考えた意見を尊重していた。「対話」によ

る教育をする上で、子どもの「発言したい!」という意欲を育てていた。「フォルケホイスコーレ」では、全寮制であるがゆえに、生活の中で学生同士や学生と教員との「対話」は必要不可欠だった。年齢も国籍も異なった学生たちが、「対話」することにより、年齢の違い、宗教の違い、文化の違い、それぞれの個性の違いを互いに認め合うことができた。

このように、デンマークでは、幼稚園、国民学校、そして成人の学校といわれる「フォルケホイスコーレ」において、一貫した「対話」による教育が行われていた。「対話」による教育では、教員と子どもは「教える」、「教えてもらう」という関係ではなく、教員と子どもは「対等」な関係であり、同等に意見を言える権利を持っていた。子どもの「問い」からはじまり、それをそれぞれの子どもがまず自分自身の中で考え、「対話」を通して他者と共にその「問い」を探究していた。「対話」を通して探究することにより、子どもたちの中にはまた新たな問いが生まれ、学びが際限なく広がっていく。つまり、子どもたちは「対話」による学びから、自分の考えを他者に表現して、他者の考えを自分の中に取り入れて、そこから自分の考えを広げたり深めたりする。そして、自分の考えをよりよいものへと変化させていく。そして、自分の考えだけではなく自分自身をよりよく変化させていく。つまり、「対話」によって「自己変革」を起こしているのである。「自己変革」が起こしているということは、佐伯（2000）のいう学ぶことによって、自分のものの見方が広がったり、自分の考えがよりよいものに変化したりする「学び」が生まれているといえる。つまり、現在のデンマークの教育実践において、「対話」による教育によって、「学び」が創造されていたといえる。

果たして、このような子どもの学びの創造を実現するために、教員として必要なことは、何であろうか。まず、子どもは子どもなりに考え、ある根拠をもった上での発言を理解することである。そして、子どもの発言が、質問に対して正解であるか不正解であるかに関係なく、子どもなりの考えを尊重することである。しかし、教員はただ子どもの考えを尊重するだけというわけではない。どのようにしてその考えが生まれたのかという子どもの思考のプロセスを教員はしっかり把握し、吟味する。そのうえで、その考えとは異なる視点から考えるきっかけを教員は子どもに向けてついたり、教員自身の考えも「よきこと」として子どもたちに訴えたりする。それに

より、子どもと教員で、または子ども同士で、互いに互いの考えを主張し合い、互いに互いの考えを聴き合い、文化として「よきこと」を共に追究する関係が生まれる。自分なりにある根拠を持った上で何かを考えている段階では、「私の考え」である。そこから、「対話」により、互いに互いの考えを主張し合い、互いに互いの考えを聴き合い、文化として「よきこと」を共に追究することで、「私の考え」から「私たちの考え」を構築することとなる。「共に「よきこと」を「対話」により探究していくこと、つまり、「私の考え」から「私たちの考え」を構築することが学びを創造するのである。このように、学びの創造を実現するために必要なことは、「私の考え」から「私たちの考え」を構築することである。

5. まとめ

子どもの学びの創造を実現するために、教員として必要なことは、子どもの中の「私の考え」から「私たちの考え」を構築することが明らかとなった。そして、「私の考え」から「私たちの考え」を構築するために必要なことは、まず教員が子どもの思考のプロセスをしっかり把握し、吟味する。そのうえで、その考えとは異なる視点から考えるきっかけを子どもに向けてついたり、教員自身の考えも「よきこと」として子どもたちに主張したりする。教員と子どもは「対等」な関係であり、同等に意見を言える権利を持つ。その上で、その関係性における教員と子どもとの「対話」によって、または子ども同士の「対話」により、互いに互いの考えを主張し合い、互いに互いの考えを聴き合い、文化として「よきこと」を共に追究する。つまり、自分なりにある根拠を持った上で何かを考えている段階の「私の考え」から、「対話」により、互いに互いの考えを主張し合い、互いに互いの考えを聴き合い、文化として「よきこと」を共に追究することで、「私たちの考え」を構築することとなる。さらに、学びの創造の過程は、「個人の考え」が社会における文化としての「よきこと」へと発展していく過程でもあることから、学びを創造するということは、文化的実践であり、「よき世界」の創造となる。

したがって、学びを創造するために、まずは教員と子どもは「対等」な関係であり、同等に意見を言える権利を持つことである。その上で、その関係性における対話によって「私の考え」から「私たちの考え」を構築することが重要であることが明らかと

なった。さらに、「私の考え」から「私たちの考え」を構築するということは、文化的実践であり、「よき世界」の創造であることをも意味している。

6. 引用・参考文献

- クリステン・コル，清水満 コルの「子どもの学校論」デンマークのオルタナティブ教育の創始者 新評論 2007 年
- 佐伯胖 「学び」の構造 東洋館出版社

2000 年

- 澤渡夏代ブランド デンマークの子育て・人育ち「人が資源」の福祉社会 大月書店 2005 年
- 清水満 生のための学校デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界 新評論 2007 年
- 錢本隆行 デンマーク流「幸せの国」のつくりかた 明石書店 2012 年